

アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身のkikuさんが綴るふるさとエッセイ

—あいなん音故地新—

「ふるさと」

春が近づいてきた。冬の間土の下で耐えてきた命が芽吹く季節。希望に満ちた季節。その前に別れが訪れる。。卒業の季節。

“仰げば尊し”のメロディーが聞こえはじめると、今でも胸の奥がキューっとなる。あたしたちは保育園が一緒ならほとんどの同級生は高校までずっと一緒というエスカレーター式、笑。同級生はみんなと幼馴染。そして、高校卒業と同時に離ればなれになる。開きかけた新しい世界への扉に希望を抱いてワクワクして、実感のないまま田舎を出ていった。18年当たり前のように一緒にいた仲間や家族と離れる寂しさを想像すらできなかつたから。

寂しさが襲ってくるのは新しい生活が始まって1か月くらいしてから。きっと今年巣立って行く中学生、高校生たちもそうだろう。別れは出会いのはじまり。今まであなたができたように、これからも新しい場所で花を咲かせられるし、今までのあなたにできなかつたことができるようになる。スタートのスイッチを押すのは自分自身。寂しさに負けず、心の隅に田舎を置いて、自分の思いを貫いてほしい。ふるさとはいつもそばにあるし、いつでもあだしを受け入れてくれる。あだしは今でもそう思う。

(テノヒラkiku)

あいなん物産探訪 その⑦

あまなつ 「甘夏」

第一マルエム青果(有)
代表取締役 松田 昌治さん しょうじ



1月下旬、甘夏の収穫が始まっていると聞いて、愛南町緑、西柳地区で柑橘農家を営む松田昌治さんをお訪ねした。山の中腹にある果樹園に到着すると、ツヤをたたえた甘夏がたわわに実っている。

緑地区では昭和40年頃に農地の構造改善事業が行われ、それに伴って甘夏栽培が始まった。松田家でもそのときに昌治さんのお父さんが甘夏の木を植え、以来50年に渡って甘夏を栽培している。

甘夏の特徴はなんといってもその甘酸っぱさだ。もぎたての甘夏をいただくと、すっと抜け

る香りのあとにさわやかな酸味がやってきた。甘夏は通常、収穫後1か月ほど寝かせてから出荷する。その間に酸が落ち着き、味が濃縮される。春先から5月にかけてが食べごろの柑橘だ。

松田さんがこだわっているのが、肥料と果樹の剪定。手間をかけることでまろやかな酸のある甘夏ができるという。目標は「親父を抜くこと。もう抜いたかな、そんなことをいうと親父に怒られるか(笑)」雨上がりの果樹園に笑い声が響いた。



▲松田さんの果樹園に実った甘夏